劇説

校注
附：譯注稿

（14）

○清　江都　焦循　撰
○中國城市戲曲研究會校譯

凡例

一、底本には『読曲叢刊』本（『叢書集成三編』所収）を用い、また『中国古典戯曲論著集成』排印本および北京図書館所蔵稿本（『続修四庫全書』所収）を参照した。

一、底本の巻頭には引用書目の一覧があり、本文で引用した典籍の書名と撰者が記されているが、本稿では掲載部分に見えるもののみを収録し、さらに巻数・提要・使用テキスト等についての注釈を加えた。

一、本文の冒頭に施した数字は、条目の通し番号である。

一、中国語で原文・校注・人名注・書名作品名注・戯曲用語注を施した。

。引用書に関する校注は、引用書該当部分の巻数あるいは篇名を、不分巻の場合はテキストの条目あるいは葉数を掲げ、また『劇説』の引用文との異同を記した。

。戯曲用語注は、広く戯曲・演劇に関わる用語を取り上げた。

一、各条目末丸括弧内に担当者名を記した。

一、本訳注稿は、中国都市芸能研究会の有志（川浩二・千田大介・氷上正・山下一夫）による読書会の成果である。いまだ不充分と思われる点も多いので、大方の批正を請う。

劇説

校注
附：譯注稿

卷六

江都　焦循　撰

301 吳藺次〈題尤悔菴《清平調》雜劇〉〔減字木蘭花〕云：「仙才供奉，豈藉尋常科第重。失却珊瑚，只笑唐家結網疎。　知君寄托，掃盡里兒容做作。爛醉沈香，此後誰堪七寶牀。」〈題《讀離騷》雜劇〉〔采桑子〕云：「瀟湘千古傷心地，歌也誰聞。怨也誰聞。我亦江邊憔悴人。　青山剪紙歸來晚，幾度招魂。幾度銷魂。不及高唐一片雲。」〈題《醉桃園》雜劇〉〔清平樂〕云：「山空石古，遮斷桃花櫓。采菊東籬杯自舉，獨把羲熙留取。　門生兒子籃輿，有時直上匡廬。人道賢哉隱者，不知禪也仙乎。」

校注

【題尤悔菴清平調雜劇】此詞收於《林蕙堂全集》卷二十三即《藝香詞鈔》卷一。

【仙才供奉】《中國古典戲曲論著集成》本「才」作「子」。

【題讀離騷雜劇】即清吳綺撰〈題悔菴《讀離騷》雜劇〉。收於《林蕙堂全集》卷二十三即《藝香詞鈔》卷一。稿本上有「藺次又」三字，「題」下有「悔菴」二字。《藝香詞鈔》「采」作「採」。

【題醉桃園雜劇】即題〈題悔菴《醉桃源》雜劇〉詞。收於《四庫全書》本《林蕙堂全集》卷二十三即《藝香詞鈔》卷一，而不見於《林蕙堂全集》衷白堂刻本。稿本上有「又」字，「題」下有「悔菴」二字。

【采菊東籬杯自舉】《藝香詞鈔》「采」作「採」。

人名注

【吳藺次】即清吳綺。號聽翁。藺次其字。江蘇江都人。順治十一（1654）年拔貢生，官至湖州府知府。以填詞聞名。著有《林蕙堂全集》。《清史稿》卷四百八十四有傳。

【尤悔菴】即清尤侗。參見卷三117條。

書名・作品名注

【清平調】即清尤侗《李白登科》雜劇。參見卷四192條「李白登科記」注。

【讀離騷】即清尤侗《讀離騷》雜劇。參見卷四192條。

【醉桃園】即清尤侗《桃花源》雜劇。參見卷四192條。

通釈

呉綺の〔減字木蘭花〕詞「尤悔庵の『清平調』雜劇に題す」にいう。

神仙のような才能を持つ供奉（の李白）は、ありふれた科挙及第の重みなどにどうしてとらわれよう。珊瑚（のごとき才人）を失うとは、笑うべきは唐朝の網目が粗く人材

を逃してしまったこと。　陛下の期待を知って田舎のこわっぱ（の安禄山）を朝廷から掃き清め、勝手気ままを許された。沈香亭で酔いつぶれ、（陛下の）七宝の寝台で眠るに値するような者がこの先いるだろうか。

〔採桑子〕詞「『読離騒』雑劇に題す」にいう。

瀟湘は千古の昔から心を傷ませる所で、歌っても誰が聞いてくれようか。恨んでも誰が聞いてくれようか。私もまた（屈原と同じように）長江のほとりで愁い悩む。　墓前にて紙を切った旗を献げ帰るのが遅くなった。幾たび魂呼ばいをしたことだろう。そして幾たび魂（こころ）が失せたことだろう。高唐の一片の雲（のように巫山の女が夢枕に立つこと）さえも無かった。

〔清平楽〕詞「『酔桃園』雑劇に題す」にいう。

人気のない山や苔むした石が、桃花の間を漕ぎゆく舟を遮った。（陶淵明は）東の垣根で菊を採り、盃を自ら挙げて、ただひとり（東晋の）義熙の年号を使い続けた。　弟子や子どもの担ぐ輿に乗り、時にはまっすぐ廬山に登った。人は言う、隠者の方は何と賢いことか。はたして生き仏か仙人かと。

訳注

【供奉】翰林供奉のこと。宮中で文書の起草を司る。

【沈香亭】唐代、長安の興慶宮の中にあり、玄宗と楊貴妃が李白に清平調の詩を書かせた場所。

【瀟湘】瀟水と湘水が合流する洞庭湖の一帯。

【紙を切った旗を献げ】紙を銭の形に切った旗を用い、魂呼ばいを行う習俗。唐の杜甫の『彭衙行』に「煖湯濯我足、剪紙招我魂（湯を暖めて我が足を濯い、紙を剪りて我が魂を招く）」とある。

【高唐】現在の湖北省江漢平原に位置する雲夢沢の中にあった高殿。戦国・宋玉の『高唐賦』では、楚の懐王がここで巫山の神女と雲雨の契りを交わす夢を見たとされるが、唐・范攄『雲溪友議』巻上「巫詠難」では、これは屈原の招魂に失敗した宋玉が、罪から逃れるために語ったものだとする。

【義熙】東晋の安帝の治世で使用された元号。405～418年。安帝を殺害した劉裕は、傀儡として恭帝を立て、元号も元熙に改めさせた上で、二年後に恭帝を廃して宋を建国したが、東晋の遺民である陶淵明はその後も義熙の元号を使い続けた。

【弟子や子どもの担ぐ輿に乗り】陶淵明が弟子や子どもの担ぐ輿に乗り、廬山に赴いて慧遠の蓮社に加わったことを指す。晋・無名氏『東林十八高賢伝』および宋・志磐編『仏祖統紀』巻二十六「浄土立教志」に見える。

【廬山】江西省九江市南部にある山。殷周交代期に匡俗ら兄弟が庵を結んだため「匡廬」とも称する。『桃花源記』の作者である東晋の陶淵明の居所。

（山下）

302

田山薑〈新秋雨夕卞司寇齋中觀尤展成《李白登科》傳奇〉詩云：「四條弦動第三廳，一闋霓裳酒未停。偶爾清歌天便妬，秋鐙寒雁雨淋鈴。」

校注

【新秋雨夕卞司寇齋中觀尤展成李白登科傳奇】即清田雯〈新秋雨夕卞司寇齋中觀劇尤展成《李白登科》傳奇〉。此詩收於《古歡堂集》巻十五〈七言絶句〉。

【四條弦動第三廳】《古歡堂集》「弦」作「絃」。

人名注

【田山薑】即清田雯。字紫綸，號山薑，一作山薑。山東德州人。康熙三（1664）年進士，官至戸部侍郎。著有《古歡堂集》。《清史稿》巻四百八十四有傳。

【卞司寇】即清卞永譽。字令子，號仙容。漢軍鑲紅旗人，卞三元之子。由廕生任通政使知事，官至刑部右侍郎。以鑑藏書畫聞名。著有《式古堂書畫匯考》。

【尤展成】即清尤侗。参見《劇説》巻三117條。

【李白】参見巻四150條「李」注。

書名・作品名注

【李白登科】参見巻四192條「李白登科記」注。

戯曲用語注

【霓裳】即「霓裳羽衣曲」。参見巻一053條。

通釈

田雯の「新秋の雨の夕卞司寇の斎中にて尤展成の『李白登科』伝奇を観る」詩にいう。

四条の弦　第三庁に動（かな）で、一関の霓裳　酒未だ停まず。
偶爾の清歌に天便ち妬み、秋鐙と寒雁と　雨淋鈴たり。（四絃（の琵琶）が（奥にある）三番目の広間で奏でられる。霓裳羽衣の一曲に、酒宴は果てることがない。おりしも清らかな歌声に天が嫉妬したのか、秋の灯火や渡ってきた雁がねに、雨がしとしと降りそそぐ。）

訳注

【雨がしとしと】原文「雨淋鈴」。唐・鄭処誨『明皇雑録補遺』に、玄宗が蜀の山中で聞いた雨音と鈴の音をもとに、楊貴妃を偲ぶために「雨淋鈴」という曲を作らせた話を踏まえる。「雨淋鈴」は「雨霖鈴」とも書く。

（山下）

303

新安呂履恆字元素，《夢月巖詩餘》有〔念奴嬌〕〈題《秣陵春》傳奇〉云：「六朝如夢，誰解道野老江頭歌哭。海思雲愁還寄托，舊部〔霓裳〕法曲。瑤水筵前、翠微宮裡，夙世仙緣卜。非空非色，個中人自如玉。　爭奈身作虚舟，心同明鏡，形影交相逐。劫火雖燒蓮性在，不怕罡風顛撲。撥盡鵑弦，撾殘羯鼓，淚斷聲難續。曲終人遠，數峯江上猶綠。」

校注

【題秣陵春傳奇】此詞見於《夢月巖詩餘》第二葉。

【個中人自如玉】《夢月巖詩餘》「個」作「箇」。

人名注

【呂履恆】即清河南新安人。字元素，號坦庵。康熙三十三（1694）年進士，官至戸部侍郎。著有《夢月巖集》、《冶古堂集》。

書名・作品名注

【夢月巖詩餘】清呂履恒詞別集。一巻。據《四庫全書存目叢書》所收青海省圖書館所藏清呂憲曾呂宣曾刻本。

【秣陵春】清吳偉業撰。南戲傳奇。四十一齣。又名《雙影集》。有清順治間原刊本。演南唐徐鉉之子徐適與黄濟之女黄展娘姻縁，以及夫妻感後主之恩，為之立廟事。

戲曲用語注

【霓裳】即〔霓裳羽衣〕。参見巻一053條。

【法曲】参見巻一042條。

【羯鼓】参見巻一016條。

【鵾弦】指琵琶弦。以鵾筋作之。

通釈

新安の呂履恒、字は元素。その『夢月巖詩余』に〔念奴嬌〕「『秣陵春』伝奇に題す」があり、いう。

六朝は夢のよう、誰が解そう在野の老人が長江のほとりでむせび泣く歌を。海のように尽きせぬ思い　雲のようにわき起こる愁いをまた寄せるのは、古の楽隊の〔霓裳〕の法曲。瑤水の宴席の前で、翠微宮の奥で、奇しき宿縁を占う。空でもない色でもない、その中の人は玉のよう。　いかんせん身を虚舟とし（てこだわりを捨て）、心は明鏡と同じ（く穢れがない）、形と影が追いかけあう（孤独な遺民の身の上）。劫火でも悟りの心は焼き尽くせぬもの、まして強い風に煽られることなど恐れはしない。琵琶の演奏が終わり、羯鼓が打ち鳴らされた余韻の中、涙に歌は続け難い。曲が終わり（劇中の）人は遠く離れたが、幾つかの山は長江のほとりで今なお青々と横たわっている。

訳注

【新安】現在の河南省洛陽市新安県。

【瑤水】瑤池のこと。崑崙山の上にあり西王母が住まうとされる。

【翠微宮】唐代、終南山に設けられた離宮。転じて山間部に建てられた離宮のこと。

（千田）

304 龔合肥邀顧黄公看丁繼之演《水滸》赤髪鬼。丁年已八十。顧即席贈以詩云：「左右看君正少年，翠鬟紅袖並花前。按歌傳遍青樓曲，作使當場白打錢。酒態慣撩監史罰，舞腰猶博善才憐。貞元朝士今無幾，卻有民間地上仙。」

校注

【贈以詩云】即清顧景星〈合肥公邀同錢牧翁看丁繼之演《水滸》赤髪鬼，丁年已八十，即席次牧翁壽丁流失詩韻〉。收於《白茅堂集》巻十。

人名注

【龔合肥】即清龔鼎孳。参見巻四162條「龔司寇」注。

【顧黄公】即清顧景星。参見巻四173條。

【丁繼之】参見巻六260條。

【赤髪鬼】即劉唐。参見巻五227條。

【善才】参見巻六291條。

書名・作品名注

【水滸】即明許自昌《水滸記》傳奇。參見卷五227條「水滸」注。

通釈

龔鼎孳は顧景星を招いて、丁継之が『水滸記』の赤髪鬼・劉唐を演ずるのを観た。丁継之は齢すでに八十であった。顧景星は即興で詩を贈った。

左右　君を看るに正に少年、翠鬟　紅袖　花前に並ぶ。
按じ歌い伝え遍ねしは青楼の曲、使と作り場に当たるは白打銭。酒態は監史の罰に撩(いど)むに慣れ、舞腰は猶お善才の憐(いつくし)みを博するがごとし。貞元の朝士　今幾も無し、却りて有り　民間　地上の仙。（間近からあなたを見たが少年のよう、黒髪のわげに赤い袖で花の前に並んでいる。音楽にあわせて歌いあまねく伝えるのは青楼の曲、使者となった場面では立ち回り。（演ずる）酔態は（酒の飲み方を監督する）監史を挑発するかのよう（に真に迫り）、舞い踊る腰つきはかの善才が人々の敬愛を集めたのを彷彿させる。かつて交流した人々はもはや何人も残っていないが、しかし市井に地上の仙人がおいでになった。）

（千田）

305

韓山子朱潮遠《四本堂座右編》云：「豫督張公自徳，先巡鹽淮揚，以『黄粱夢』徴詩。予偶投句云：『從前熟讀爛柯經，不免邯鄲此道行。桃葉洞中遇漢、魏，白雲枕上建功名。十年宰相身原在，一夢河山飯未成。蛙市蜂衙烏兔疾，金鞭指我過蓬、瀛。』公一見，即折節造謝。」

校注

【四本堂座右編】此條見於二集卷六〈雅量〉。

【予偶投句云】《四本堂座右編》「予」作「余」。

【即折節造謝】《四本堂座右編》下有「其虚心如此」五字。

人名注

【韓山子朱潮遠】即清朱潮遠，字卓月，韓山子當為其號。江蘇揚州人。康熙間撰《四本堂座右編》。生平未詳，待考。

【張公自徳】即清張自徳，字元公，號潔源。順天豐潤人。順治四（1647）年進士，官至工部尚書。

書名・作品名注

【四本堂座右編】清朱潮遠輯。二十四卷、二集二十四卷。每集分四門，毎門又各分六子目，毎目為一卷。雑採前言往行。據《四庫未收書輯刊》所收《四本堂座右編二集》清康熙間刻本。

通釈

韓山子こと朱潮遠の『四本堂座右編（二集）』にいう。

河南巡撫であった張自徳が、かつて淮揚で巡塩御史の任にあった際、「黄粱夢」を題に詩を募集した。私はたまたま詩句を投じた。「従前　熟読せし爛柯の経、免れず　邯鄲の此の道行。桃葉の洞中　漢・魏に遇い、白雲の枕上　功名を建つ。十年の宰相　身　原より在り、一夢の河山　飯　未だ成らず。蛙市蜂衙に烏兔は疾く、金鞭　我を指し　蓬・瀛を過る。（かつて時の経つのを忘れて爛柯の経を熟読したが、このたびの邯鄲への旅行きは免れ得なかった。桃源郷に漢や魏の時代から生きている人びとに出くわし、白雲の枕の上で（夢の中に）

功名をあげた。十年間宰相を務めたはずが体はもとのまま、夢に見た国の出来事は飯も炊きあがらない瞬間のこと。町の喧噪や宮廷の行列に月日は瞬く間に過ぎ去った、（仙人が）金の鞭で私を指し蓬萊・瀛州の仙山へと誘ったのであった。」張自徳は一読するや、へりくだって挨拶に来た。

訳注

【巡撫】巻三121訳注参照。

【淮揚】江蘇省の長江以北の地域を指す。

【爛柯の経】晋の時代に王質という樵が山中で童子が碁を打つのを見物していたところ、いつしか斧の柄が朽ち果て、里には知っている人が居なくなっていた、という梁の任昉の『述異記』に見える故事をふまえる。

【巡塩御史】明清代、地方の塩の輸送を巡察・監督する官。

【邯鄲】現在の河北省邯鄲市。

（千田）

306

吾郡閨秀徐淑則〈觀演《長生殿》〉詩云：「鈿合金釵事渺然，徒勞瀛海問神仙。可憐空有他生誓，何處重逢七夕緣。宮監歸來頭似雪，梨園老去散如煙。今宵聽奏〔霓裳〕曲，誰賜開元舊寶錢。」

人名注

【徐淑則】即清徐德音，淑則其字。浙江錢塘人。徐旭齡女，許迎年室。工詩詞。著有《綠淨軒詩鈔》、《紀瑞詩集》。

書名・作品名注

【觀演長生殿】即〈觀演《長生殿》劇〉。收於《綠淨軒詩鈔》巻一。據中國國家圖書館所藏《高陽五種詩》清刻本所收本。《長生殿》，参見巻四150條。

戲曲用語注

【霓裳】即〔霓裳羽衣〕。参見巻一053條。

通釈

わが郡の女流である徐德音の「『長生殿』を演ずるを観る」詩にいう。

鈿合金釵　事は渺然、徒労に瀛海に神仙を問う。憐れむ可し　空しく他生の誓い有り、何処にか重ねて七夕の縁に逢わん。宮監　帰り来たれば頭は雪に似、梨園　老い去りて散ずること煙の如し。今宵〔霓裳〕曲を奏でるを聴く、誰れか賜わらん　開元の旧宝銭を（玄宗と楊貴妃の愛の印である）螺鈿の宝石箱と金の釵の話は茫漠としているのに、（安史の乱の後、玄宗に頼まれた道士は）いたずらに海の彼方の仙山に神仙（となった楊貴妃）を訪ねた。憐れむべきは（二人の）来世も結ばれようとの誓いがむなしくなり、再び七夕に巡り会うことができないこと。宦官（の高力士）が（安史の乱の後、長安に）帰ってきたときには頭は雪のようになっており、梨園の子弟は年老いて立ち去り煙のように消えてしまった。今宵〔霓裳〕の曲を奏でるのを聴いた。唐の開元年間の古い宝の銭を褒美に取らせる人はいないだろうか）。」

訳注

【わが郡】焦循の出身地である江蘇省揚州を指す。

（千田）

307 班中演《長生殿》者，每忌全演，相傳全演則班必散。乾隆三幾年，長白伊公按鹺兩淮，故令春臺班演全部《長生殿》以試之，乃是秋春臺班竟以他故散去。趙仰葵所云。

校注

【班中演長生殿者】按：此條原置於稿本之卷六298條後，而《讀曲叢刊》本未收，今補。

【故令春臺班】《劇説》諸本「臺」作「台」，今改。

人名注

【長白伊公】即清伊齡阿。滿洲鑲黃旗人。冬佳氏，字精一。乾隆間由筆帖式補主事，歷任兩淮鹽政、浙江巡撫，官至工部右侍郎。工詩，能書畫。按：伊齡阿乾隆四十三（1778）年始任兩淮鹽政，與此文不合。待考。

【趙仰葵】即清趙鴻遠。仰葵其字。江蘇蘇州人。乾隆間在世。醫，能治奇疾。

書名・作品名注

【長生殿】參見卷四150條。

戲曲用語注

【春臺班】清代揚州戲班。按：乾嘉間四大徽班有春臺班，乾隆末年晉京，而此云「乾隆三幾年」「以他故散去」，可知其非四大徽班之春臺班。待考。

通釈

『長生殿』を演じる場合、劇団は全編を通しで演じることを禁忌としている。全編を通しで演じたならば、その劇団は必ず解散してしまうと、言われている。乾隆三十何年に、長白の伊齡阿が両淮塩政を務めた際、試みに春台班に『長生殿』を全編通しで演じさせてみた。するとその年の秋に、春台班は別の理由がもとで解散してしまった。これは趙鴻遠による。

訳注

【長白】吉林省長白山を指す。伊齡阿一族の故地とされる。

【両淮塩政】原文は「按鹺兩淮」。清代、地方の塩の専売を司る長官。江蘇省北部を管轄した。

（永上）

花部農譚

○清　江都　焦循　撰
○中國城市戯曲研究會校譯

校注
附：譯注稿

凡例

一、底本には北京図書館所蔵稿本（『続修四庫全書』所収）を用い、『中国古典戯曲論著集成』排印本および『懐豳雑俎』本を参照した。
一、本文の冒頭に施した数字は、条目の通し番号である。
一、中国語で原文・校注・人名注・書名作品名注・戯曲用語注を施した。
　。花部の演目については、物語の概要、京劇等の伝統劇の類似劇目、および物語の材源を注記した。
　。戯曲用語注は、広く戯曲・演劇に関わる用語を取り上げた。
一、各条目末丸括弧内に担当者名を記した。
一、本訳注稿は、中国都市芸能研究会の有志（川浩二・千田大介・氷上正・山下一夫）による読書会の成果である。いまだ不充分と思われる点も多いので、大方の批正を請う。

花部農譚

序

梨園共尚吳音。花部者，其曲文俚質，共稱為亂彈者也，乃余獨好之。蓋吳音繁縟，其曲雖極諧於律，而聽者使未覩本文，無不茫然不知所謂。其《琵琶》、《殺狗》、《邯鄲夢》、《一捧雪》十數本外，多男女猥褻，如《西樓》、《紅梨》之類，殊無足觀。花部原本於元劇，其事多忠、孝、節、義，足以動人。其詞直質，雖婦孺亦能解，其音慷慨，血氣為之動盪。郭外各村，於二、八月間，遞相演唱，農叟、漁父，聚以為歡，由來久矣。自西蜀魏三兒倡為淫哇鄙謔之詞，市井中如樊八、郝天秀之輩，轉相效法，染及鄉隅。近年漸反於舊。余特喜之，每攜老婦、幼孫，乘駕小舟，沿湖觀閱。天既炎暑，田事餘閒，群坐柳陰豆棚之下，侈譚故事，多不出花部所演，余因略為解說，莫不鼓掌解頤。有村夫子者筆之於冊，用以示余。余曰：「此農譚耳，不足以辱大雅之目。」為芟之，存數則云爾。

嘉慶己卯六月十八日立秋，雕菰樓主人記。

人名注

【魏三兒】即清魏長生。字婉卿，俗稱魏三。四川金堂人。秦腔優人。工花旦。乾隆四十四（1779）年入京，演唱《滾樓》，風靡一世。

【樊八】按：清乾嘉間優人有樊大，見於《揚州畫舫錄》卷五，或為其人。

【郝天秀】清安徽安慶人。《郝代宗譜》：諱邦晟，字天季，號厚培。《揚州畫舫錄》卷五：諱天秀，字曉嵐。乾嘉間花部優人，工花旦。得魏長生之神。

【雕菰樓主人】即清焦循。字里堂，號雕菰樓主人。江蘇揚州人。嘉慶六（1801）年舉人。著有《雕菰樓集》、《雕菰樓易學》等。

書名・作品名注

【琵琶】即元高明《蔡伯喈琵琶記》傳奇。參見《劇說》卷一052條。

【殺狗】即明徐畧《殺狗記》傳奇。參見《劇說》卷一076條。

【邯鄲夢】即明湯顯祖《邯鄲記》傳奇。參見《劇說》卷二086條「邯鄲夢」注。

【一捧雪】即明李玉《一捧雪》傳奇。參見《劇說》卷三136條。

【西樓】即明袁于令《西樓記》傳奇。參見《劇說》卷三118條。

【紅梨】即明徐復祚《紅梨記》傳奇。參見《劇說》卷四158條。

戲曲用語注

【吳音】即崑曲。

【花部】清乾嘉間，崑曲、弋陽腔為士人所尚，謂之雅部，而徽調、梆子戲等為市井所喜，謂之花部。

【亂彈】亂彈有兩義。一則戲曲聲腔，即亂彈腔。一則花部劇種、聲腔之或稱。此則後者。

【元劇】即元雜劇。參見《劇說》卷一005條「雜劇」注。

通釈

舞台では崑曲が尊重されている。花部は、歌詞が通俗的であり、乱弾と総称されているが、私はこれが好きだ。思うに崑曲は（歌詞に）文飾がほどこされ、曲は音律にぴたりと叶ってはいるが、観客は台本を見ないと、何を言っているのかさっぱり分からない。『琵琶記』・『殺狗記』・『邯鄲記』・『一棒雪』など十数種の伝奇を除くと、大半は男女の色恋沙汰を描いた『西楼記』・『紅梨記』などのような作品で、全く見るに値しない。花部の演目はもともと元雑劇にもとづいており、扱っている物語は、大半が忠・孝・節・義などを主題とするもので、とても感動的である。歌詞は素朴で、女性や子供でも理解でき、その曲調は激しく歌い上げるもので、（観る者の）血の気が激しく揺さぶられる。城外の村々では二月、八月になると、次々に上演され、農民や漁民の年寄連中が集まっては楽しむということが、かなり昔から行われている。四川の魏長生が淫らで下卑た歌詞を広め、市井では樊八や郝天秀といった連中がお互いにそれを模倣しあって、村々まで（その流行に）染まってしまったが、近年ようやく元の姿に戻ってきた。私は特にこれが好きで、いつも（一族の）老婦人や幼い孫たちを引き連れ、小舟に乗り、湖沿いに観劇した。炎暑になると、農作業の合間、（農民たちは）柳の陰や藤棚の下に集まり座って、大いに物語を談じていたが、大半は花部の演目から外れるものではなかった。そこで私が少し解説をしたところ、一同手を叩いて大笑いした。ある村の先生がそれを書き留めて、私に見せた。私は「これは農譚（のうみんのおしゃべり）に過ぎません。教養ある人にお目にかけられるようなものではありません」と言った。そして、いくつかの話だけを残し、あとは削ったのである。

嘉慶二十四（1819）年六月十八日立秋、雕菰楼主人記。

（永上）

01 花部所演有《鐵丘墳》者，一名《打金冠》，為薛剛打殺偽太子，夷其三族，逮其兄薛猛於陽河誅之。偽太子者，武氏私幸薛懷義所生，所為驢頭太子者也。徐勣閔薛氏之鬼餒而，乃自以其子易薛之子而撫育之。其〈觀畫〉一齣，竟生吞《八義記》。乃《八義》之程嬰，本諸太史公之〈晉世家〉，嬰乃趙氏家臣，以己子易趙子，見其忠於所事。若勣於薛氏，既非故主，亦非深交，而公然以己之子易薛之子，在己大為不仁，於薛亦不足為義，豈非無稽之至者哉。而何苦為之。及細究其故，則妙味無窮，有非《八義記》所能及者。〈觀畫〉之後，薛氏子去之韓山，起義師，直入長安討武氏。韓山者，邗上也，既徐敬業起兵之事也。今則不曰徐敬業而曰薛交，若曰：以徐勣之人，豈得有此忠義之子，能起義兵為國討亂。當日所謂徐敬業，實薛氏子薛交也。是徐勣之子也，而非徐勣之子也。徐勣之人，焉得有此忠義之子。作此戲者，假《八義記》而謬悠之，

以嬉笑怒罵於勣耳。彼《八義記》者，直抄襲太史公，不且板拙無聊乎。

校注

【鐵丘墳】原避孔子諱作「邱」。今改。

人名注

【薛剛】說部薛家將故事中人物。薛仁貴之孫，薛丁山之三子。見於清鴛湖漁叟《說唐三傳》等。

【偽太子】即驢頭太子。說部薛家將故事中人物。按：小說《異說反唐全傳》為騾頭太子，小說《說唐三傳》為驢頭太子，均為武則天與薛敖曹之子。而薛剛打死者，《異說反唐全傳》為七太子李昭，《說唐三傳》為宰相張君左之子張保，非驢頭太子。

【薛猛】說部薛家將故事中人物。薛丁山之子。小說《異說反唐全傳》為長子，《說唐三傳》為次子。

【武氏】即武則天。

【薛懷義】唐京兆鄠縣人。本姓馮，名小寶。得武則天之寵，官至右衛大將軍。《舊唐書》卷一百八十三有傳。

【徐勣】即唐李勣。參見《劇說》卷一045「徐茂公」注。按：換子者，小說《異說反唐全傳》為李勣之子徐敬猷，《說唐三傳》為李勣之侄孫徐賢，京劇、梆子戲等為李勣後人徐策。

【程嬰】春秋晉人。仗義存趙孤。

【太史公】即漢司馬遷。參見《劇說》卷三137條「司馬遷」注。

【徐敬業】唐曹州離狐人。李勣之孫。襲封為英國公，武則天登基後，據揚州而反，兵敗為部下所殺。《舊唐書》卷六十七、《新唐書》卷九十三有傳。

【薛交】說部薛家將故事中人物。薛丁山之孫。小說《異說反唐全傳》、《說唐三傳》，京劇、梆子戲等作「薛蛟」。

戲曲用語注

【花部】參見《花部農譚》序「花部」注。

書名・作品名注

【鐵丘墳】清代花部劇目。甘肅靖遠清嘉慶間古鐘有鑄目。演薛剛反唐事。京劇、梆子戲等亦有此戲。事見小說《異說反唐全傳》、《說唐三傳》等。

【打金冠】即《鐵丘墳》。

【觀畫】清花部劇目《鐵丘墳》之一折。按：京劇、梆子戲等有《舉鼎觀畫》。

【八義記】參見《劇說》卷二085條「八義」注。

通釈

花部の演目に『鉄丘墳』、別名を『打金冠』というものがある。薛剛が偽太子を殴り殺したために、一族皆殺しとなり、その兄薛猛は陽河で捕えられて処刑される。偽太子というのは、則天武后が薛懐義と私通して生まれたもので、驢頭太子と呼ばれる。徐勣は薛家の祭祀が絶えるのを哀れんで、自らの子を薛氏の子とすり換えて育てる。その「観画」の一節は、つまるところ『八義記』を引き写したものである。『八義記』の程嬰は、司馬遷『史記』の「晋世家」に基づいている。程嬰は趙家の家臣であり、自らの子を趙家の子とすり換え、主への忠義を示した。徐勣と薛氏はといえば、もとの主でもなければ、親交があったわけでもない。それなのになんと自らの子を薛剛の子とすり換えるのであるから、

自分についてははなはだ不仁であり、薛氏からしても義とするには不十分である。まったくもって動機のないことで、どうしてこんなことをするのだろうか。しかしその基づくところをつきつめていくと、妙味は限りなく、『八義記』よりもすぐれたところがある。「観画」の場面の後で、薛家の子は韓山に行って義軍を起こし、まっすぐ長安に攻め込んで武氏を打倒する。韓山というのは邗上であり、すなわち徐敬業が起兵したことを指すのである。今の『鉄丘墳』で徐敬業といわずに薛交というのは、あたかもこう言っているようだ。李勣のような人物に忠義の子が生まれ、義軍を起こして国の為に乱を討つことがあるはずがない。かつて徐敬業と呼ばれていたのは、実は薛氏の子の薛交であり、李勣の子であって、李勣の子ではない。李勣のような人物に、このような忠義の子ができるはずがない、と。この芝居の作者は、『八義記』を下敷きにでたらめにすることで、李勣を笑いものにし怒り罵ったのである。かの『八義記』は、ただ司馬遷を引き写しただけで、やはり平板で拙劣、退屈なものにほかならない。

訳注

【陽河】山西省晋城市に源を発し、西北に流れて沁水に注ぐ川。

【長安】現在の陝西省西安市。

【韓山】広東省潮州市に同名の山があるが、薛剛が立てこもったのは架空の山である。梆子戯『挙鼎観画』・『徐策跑城』などにも見える。一方、小説『異説反唐全伝』・『説唐三伝』および京劇・梆子戯などの多くの演目では、薛剛が九炎山に立てこもったとする。

【邗上】現在の江蘇省揚州市の別名。

【李勣のような人物】高宗が武氏を皇后に立てようとした際、長孫無忌らが猛反対したのに対して、李勣が陛下の家事であると無責任に対応したことが、後の則天武后の簒奪の道を開いたことを踏まえる。

（川）

02《龍鳳閣》慷慨悲歌，此戯當出於明末。〈擊宮門〉一齣，即隱移宮之事也。李娘娘，即選侍也。楊波即楊漣，漣之為波，其意最明。徐量即是徐養諒。但故謬為神宗事耳。神宗太后雖亦姓李，其父李偉有賢稱。

人名注

【李娘娘】龍鳳閣故事中人物。明穆宗寵妃。按：京劇《龍鳳閣》作「李艶妃」。

【選侍】即明李康妃。光宗寵妃，熹宗養母。《明史》巻一百一十四有傳。

【楊波】龍鳳閣故事中人物。明穆宗朝兵部侍郎。

【楊漣】明湖廣應山人。字文孺，號大洪。萬暦三十五（1607）年進士。官至左副都御史。著有《楊大洪先生集》、《楊忠烈公文集》。《明史》巻二百四十四有傳。

【徐量】龍鳳閣故事中人物。按：京劇作「徐延昭」，梆子戯作「徐彦昭」，均為明開國功臣徐達後裔。

【徐養諒】即明徐養量，字叔弘，一字京咸。湖廣應城人。萬暦三十五（1607）年進士。官至兵部尚書。

二派に分かれて対立した。楊漣、左光斗らは李康妃を皇帝の寝宮である乾清宮から仁寿殿に移らせ、皇帝への影響を排した。

（川）

03

陳家谷口之敗，楊無敵與子延玉並死於難，其端由於王侁忌功不救。時督師者潘美。業本欲待時而動，美不能用其謀。及侁遁，美不能禁，美亦沿河而去。業力戰谷口，見無人，乃大呼：「奸臣誤我。」還戰遂死。則美之陷業可知，不盡關乎侁也。美，良將也，豈一王侁不能制。自此敗之後，國威大損。宋之弱，實由於美矣。後太宗以足創甚，召寇準於青州，而壽王之位定。澶州一役，庶洗從前之恥。花部有《兩狼山》劇，演楊業死事，則全歸獄於美。延昭愬枉於朝，召寇準讞定其獄，而潘之害賢，寇之嫉惡，淋漓慷慨，豪髮畢露，若曰：業之死，向令得準斷之，則美之罪當不止於奪官而已。宋之於遼，自潘而弱，自準而振，且恨當時未有忘身狥國、秉道嫉邪如準者訊之，杖之，大聲指罵之，假鬼神嬲弄之，乃使美得逃其咎也。尤謬悠者，則潘方統重師，朝廷遣官逮之，莫敢動，適王侁怨美殺其兄，乃擒美致檻車，而侁即統其軍。蓋美陷業而委其罪於侁，史如其所委者書爾。而特於楊業口中出奸臣二字，美之為奸臣，實以此互見之，有《春

【神宗】即明萬曆帝朱翊鈞。

【神宗太后】即明孝定李太后。名鳳仙。直隸漷縣人。神宗生母。帝即位，贈尊號慈聖皇太后。《明史》卷一百一十四有傳。

【李偉】明直隸漷縣人。字世奇。神宗生母李太后之父。《明史》卷三百有傳。

書名・作品名注

【龍鳳閣】清花部劇目。按：京劇《龍鳳閣》即〈大保國〉、〈嘆皇陵〉、〈二進宮〉之總稱。梆子戲亦有此戲。崑弋腔、鼓詞等有《香蓮帕》，亦演此事。《春臺班戲目》有〈進宮〉。據京劇《龍鳳閣》，演明穆宗駕崩，太后李娘娘垂簾聽政，與父李良攝政，兵部尚書楊波、定國公徐延昭力諫而太后不悟，後太后知李良謀篡，召楊、徐誅斬李良事。

【擊宮門】清花部劇目《龍鳳閣》之一折。按：京劇〈二進宮〉亦稱〈擊宮門〉。

通釈

『竜鳳閣』は世の乱れを嘆き悲しむものだ。この芝居はおそらく明末に作られたものだろう。「擊宮門」の一節は、移宮案を暗示している。（『竜鳳閣』の）李娘娘は李康妃のことである。楊波は楊漣のことであり、漣は波のことであるのだから、その意図は明々白々である。徐量はすなわち徐養量のことである。しかしわざと万暦帝のときの話に違えている。万暦帝の皇太后もまた李姓であったが、父の李偉は賢人であると言われた。

訳注

【移宮案】天啓帝朱由校の即位にあたり、皇帝の後見を万暦帝の寵愛を受けた李康妃にするかどうかをめぐって官僚たちが

秋》之嚴焉。為此戲者，直並將侁洗去，使罪專歸於美，與史筆相表裡焉。侁，音莘，演者或誤為仄聲，非是。

人名注

【楊無敵】即宋楊業。參見《劇說》卷二080條。

【延玉】即宋楊延玉。并州太原人。楊業之子。與楊業並死於陳家谷口。

【王侁】參見《劇說》卷二080條。

【潘美】參見《劇說》卷二080條。

【業】即宋楊業。

【太宗】即宋太宗。

【寇準】參見《劇說》卷四151條「寇萊公」注。

【壽王】即宋真宗。

【延昭】即宋楊延昭。參見《劇說》卷一031條「楊六使文廣」注。

書名・作品名注

【兩狼山】清代花部劇目。演宋楊業被潘美陷害，楊延昭告御狀，太宗調寇準，審判潘美，斷其罪事。按：雜劇有元、明間無名氏《八大王開詔救忠臣》，京劇、梆子戲有《李陵碑》、《夜審潘洪》等，亦演此事。

【春秋】傳春秋魯孔子撰。儒家五經之一。

戲曲用語注

【花部】參見《花部農譚》序注。

通釈

陳家谷口の敗戦で、楊業とその子の楊延玉が不幸にも陣没したのは、王侁が手柄を妬んで救援を差し向けなかったことに端を発する。この時の総大将は潘美だった。楊業はもともと時を待ってから動くことを望んだが、潘美はその作戦を採用しなかった。王侁が逃走するに及ぶと、潘美はそれをやめさせることができなかったばかりか、河に沿って逃げてしまった。楊業は谷の入口で奮戦したが、（味方が）誰もいないのを見て、「奸臣めに陥れられた」と叫び、とってかえして討ち死にした。そうであるからには、潘美が楊業を陥れたことが分かり、すべてが王侁のせいではない。潘美は良将であるから、王侁一人を御し得ないはずはない。この敗戦の後、国威は大いに損なわれた。宋の弱体化は、本当は潘美が原因である。後に宋の太宗は、足の傷が酷くなったので、寇準を青州から召し出して（後継ぎについて意見を求め）、寿王（後の真宗）を皇太子に定めた。そして（遼と宋の）澶淵の役で、（寇準は遼との戦いを主導し）以前の恥辱をすすごうとした。花部には『両狼山』という演目があり、楊業の死を描いているが、そこではすべてを潘美の罪に帰している。楊延昭が父の名誉回復を朝廷に訴え出たので、（朝廷は）寇準を召し出して案件を審判させた。潘美が優れた人物を害することや、寇準の悪を憎むさまが、生き生きと細大漏らさず描き尽くされている。これはあたかも、「楊業が死んだ時、寇準に審理させることができたならば、潘美の罪は官職を奪われるだけではすまなかっただろう」と言っているかのようである。宋は遼に対して、潘美からは守勢に入り、寇準から盛り返した。我が身を顧みず国に殉じ、正道に則って悪を憎む、寇準のような者がいて、これを調べ、罰し、大声で罵り、鬼神のふりをして愚弄したなら、潘美は罪から逃れられなかったろうに、何とも

恨めしいことだ。（『両狼山』で）荒唐無稽な部分といえば、潘美は大軍を率いるようになったところで、朝廷が役人を派遣して逮捕しようとしたが、誰も引き受けようとしなかった。ちょうど王侁が兄を殺した潘美を恨んでいたため、潘美を捕らえて護送車に乗せ、王侁がその軍の指揮をかわりに執ったことである。それはおそらく、潘美が楊業を陥れてその罪を王侁になすりつけたのだが、史書はそれに従って記載してしまったのだろう。なにしろ楊業の口から奸臣という言葉が出ているのだから、潘美が奸臣だということは、実はこのように見比べてみると、あたかも『春秋』のような厳しさであることが分かる。この劇を作った者は、王侁の罪をすべて、罪を潘美のみに帰しており、史書の筆致と表裏の関係にある。侁は「莘」と同じ発音である。役者の中には誤って仄声で発音する者もいるが、そうではない。

訳注

【陳家谷口】陳家谷は現在の山西省朔州市朔城区の南に位置する。雍熙三（986）年、ここで遼と宋の戦いが行われ、楊業が戦死した。

【青州】現在の山東省濰坊市青州市。

【澶州】現在の河南省濮陽市。

【鬼神のふりをして愚弄した】京劇『夜審潘洪』では、寇準が地獄の判官に扮して潘洪（すなわち潘美）を裁き、夢の中と思い込んだ潘洪が罪状を自白する。

（山下）

04 唐張仁龜，本張尚書之庶子，其嫡不容，尚書乃使遠為張處士之子，有手書為據。仁龜稍長，漸知其為尚書子，乃竊據而逃之京師。既登第，仕為官，遂忘處士養育之義。處士以無據，鬱恨而死。已而仁龜出使，自縊於驛亭，相傳為張處士冥訴陰譴之。事載《北夢瑣言》。花部中演為《清風亭》劇，張處士仍姓張，仁龜則謬為薛氏子。其本末略同。處士夫婦以織扉磨豆為生。拾得此子，有血書乞人收養，處士力貧撫育，得存活。至十數歲，適其生母過此，乃竊血書逃去，登第，出使矣。張自此子出逃，其婦日詬，以思兒得疾，不復能磨豆。張日扶其病婦至清風亭望此兒歸。蓋年皆七十許矣。久之，愈衰老困苦，行乞而食，暇則仍延頸於清風亭。一日，傳有貴官至，將憩於亭。坊甲洒掃見二老人，因曰：「吾昨見此官，殊與翁媼之逃子面相似。明日官憩此，翁媼其潛近處。吾驗視誠然，來為翁媼告也。」二老人喜甚。明日，坊甲驗視不錯，乃欣然招二老人。二老人欣然至，入亭視之，良是。往呼兒，其子怒曰：「是何乞兒，妄謬至此。」翁媼乃歷述十數年養育事，仍不動，惟曰：「持據來。」據則已竊去，固無有也。於是二老人乃蒲伏叩頭曰：「公貴人，我小民豈敢以撫育微勞冒認父子。但十數年相依，姑作一家僕乳婢，攜我兩人，生食之，死棺之，免餓斃於路，他無敢望矣。」其侍從奴僕感動，跪代為乞。此子曰：

「此兩乞丐，得二百錢足矣。」乃以錢二百給之，撝於亭外。媼讓翁曰：「兒恨爾，爾素督責其讀書過切。我則保持之，雖長，未嘗一日離諸懷也。爾姑退，我獨求之，伊當憐念我。」媼復入，此子怒詈益甚。媼大哭，以錢擊其面，觸亭而死。翁見媼久不返，往視，見媼死，亦大慟，以首觸地死。此子轉訶斥坊甲勾引，坊甲亦強項不服。此子竟撝騶從去。乃作天雷雨狀，而此坊甲者冒雨至亭下，見有披髮跪者，乃雷殛死人也。視之，則前之貴官，右手持錢二百，左手持血書。坊甲乃大聲數其罪而責之。此即張處士鬱恨而死、仁龜得陰譴之所演也。鬱恨而死，淋漓演出，改自縊為雷殛，以悚懼觀者，真巨手也。據崑腔劇中，雷殛二事：一為《雙珠》之李克成、張有得。克成以營長謀姦營卒之婦，羅致卒死罪，致其婦以死明節。此事見《輟耕錄》。卒雖因婦死得釋，所賣子亦歸，惟營長未有報，故思得天雷殛之為快耳。然作《雙珠》劇者，營卒妻賣子、投淵之後，既得神救不死，父子夫妻後俱完聚，則李克成固亦天所不必誅也，故《雙珠》之李克成、張有得雖遭雷殛，尚不足以警動觀者。至《西樓》之趙不將，祇以口筆之嫌構其父，父禁于叔夜不許私妓，在趙固洩私忿，而其言非不讜正，以是而遭雷殛，真為枉矣。蓋袁于令與趙鳴陽素隙，心恨之，思得雷殛乃快，《西樓》之趙不將，即指鳴陽也。鳴陽人品學問，豈袁所及，故馮猶龍刪改《西樓》，毅然刪去此折，是也。余憶幼時隨先子觀村劇，前一日演《雙珠・天打》，觀者視之漠然。明日演《清風亭》，其始無不切齒，既而無不大快。鐃鼓既歇，相視肅然，罔有戲色。歸而稱說，浹旬未已。彼謂花部不及崑腔者，鄙夫之見也。

校注

【北夢瑣言】此事見於《北夢瑣言》卷八〈張仁龜陰責〉。

【織扉磨豆】《中國古典戲曲論著集成》本「扉」作「扉」。從稿本、《懷豳雜俎》本。

【輟耕錄】此事見於《輟耕錄》卷十二〈貞烈墓〉。

人名注

【張仁龜】參見《劇說》卷二105條。

【張尚書】即唐張裼。參見《劇說》卷二105條。

【張處士】參見《劇說》卷二105條。按：京劇《清風亭》作「張元秀」。

【薛氏子】按：京劇《清風亭》之張繼保，係薛榮之子。

【李克成】《雙珠記》傳奇中人物。唐時營長，誣陷其部卒王楫，欲霸占王楫妻郭氏。

【張有得】當作張有德。《雙珠記》傳奇中人物。訟師。與李克成謀陷王楫。

【趙不將】參見《劇說》卷三119條。按：《西樓記》傳奇作「趙伯將」，而《西樓記》之馮夢龍改本《楚江情》傳奇則作「趙

不將」。

【于叔夜】參見《劇說》卷三119條。

【袁于令】參見《劇說》卷三119條「籜菴」注。

【趙鳴陽】參見《劇說》卷三119條。

【馮猶龍】即明馮夢龍。參見《劇說》卷三119條「馮猶龍」注。

書名・作品名注

【北夢瑣言】參見《劇說》卷二105條。

【清風亭】參見《劇說》卷二105條「清風亭認子」注。

【雙珠】即明沈鯨《雙珠記》傳奇。參見《劇說》卷四144注。

【輟耕錄】參見《劇說》卷首引用書目。

【西樓】即明袁于令《西樓記》傳奇。參見《劇說》卷三119條。

【天打】即《雙珠記》第二十一齣〈真武靈應〉。按：《綴白裘》二集卷二收〈天打〉一齣，其曲白與《六十種曲》本迥異。

通釈

唐の張仁亀は、もともと張尚書の庶子であったが、正妻が受け入れなかったため、張尚書は遠く張処士に養子に出し、直筆の手紙をその証とした。張仁亀は成長した後、ようやく自分が張尚書の子であると知ると、証を盗んで都に逃げた。科挙に合格し、仕官すると、張処士の育ての恩を忘れてしまった。張処士は証が無いため、鬱々と恨んで死んでしまった。張仁亀は使者に赴いた際、宿場で首を吊ってしまったが、張処士が冥府に訴えたために罰せられたのだと噂された。この事は『北夢瑣言』に載っている。花部では『清風亭』劇として演じられており、張処士の姓は張のままだが、仁亀はといえば薛氏の子に違えている。その物語はほぼ同じである。すなわち、張処士夫婦は草鞋を編み豆をひいて生計を立てていた。捨て子を拾ったところ、養育を頼む血書を持っていた。張処士は貧しいなか懸命に子育てしたので、生きながらえることができた。十数歳になって、たまたま生母がその地を訪れたので、血書を盗み取って逃げ、科挙に合格し、地方に赴任した。張処士の妻は日々後悔し、子供を思って病になり、豆をひくことができなくなった。張処士は日々、病の妻を介添えして清風亭に行き、子の帰りを待ち望んだ。いずれも齢七十余りであったのだろう。やがて、ますます老いさらばえて困窮し、物乞いして食いつなぐようになったが、暇さえあれば必ず清風亭で首を長くして待ち望んでいた。ある日、偉い役人がやってきて、清風亭で休息すると伝えられた。顔役が（清風亭を）掃除していると老夫婦に会ったので言った。「私はそのお役人を昨日みかけましたが、お二人の逃げたお子さんにそっくりでした。明日、お役人がここでご休憩なさいますので、お二人は近くに隠れていなさい。私が確かめてみて間違いなければ、お二人にお知らせしましょう。」老夫婦は大喜びした。翌日、顔役が確かめてみると間違いなかったので、喜んで老夫婦を招き寄せた。老夫婦は喜んでやってきて、清風亭に入って見てみると、まさしくその通りだった。息子よと言って歩み寄ると、その子は怒って言った。「どこの乞食が世迷い言を抜かすか。」老夫婦は十数年にわたって養育したことを言い立てたが、子は心を動かされることなく「証拠を持ってこい」とだけ言った。証拠は盗み取られており、あろうはずもない。そこで老夫婦は土下座して言った。「あなた様は貴人、私は一介の庶民、どうして養育したからといって親子と認めて頂こうなどと申しましょうか。しかし十数年寄り添い合ってきたのですから、召使い

や乳母にしていただき、我ら二人を連れて行き、生きている間は食べさせて、死んだ後は埋葬していただき、行き倒れることのないようにして貰えましたら、他に望みはございません。」子の従者・下僕も感動し、跪いて老夫婦をとりなした。その子は言った。「この二人の乞食には、銭二百文を与えれば十分であろう。」そして銭二百文を与えて、亭の外に追い払った。お婆さんはお爺さんをなじって言った。「あの子はあんたを恨んでいるのだ。あんたはいつも勉強をするように五月蠅く言いすぎていたから。私はいつもかばってあげていたから、大きくなっても懐から離れませんでした。あなたは下がっていなさい。私が一人でお願いすれば、あの子も哀れに思ってくれるでしょう。」お婆さんは再び入ったが、子はますます酷く怒鳴りつけた。お婆さんは号泣して、銭で子の顔に打ちかかると、亭の柱に自ら頭をぶつけて死んでしまった。お爺さんはお婆さんがなかなか戻ってこないので、見に行ってみると、お婆さんが死んでいたので、やはり慟哭して地面に頭を打ち付けて死んでしまった。子は今度は手引きしたとして顔役を叱責したが、顔役も頑として認めなかった。子は従者をせき立てて去って行った。すると雷雨となり、顔役が雨をおして亭に行ってみると、ざんばら髪で跪いているものがいた。雷に打たれた死体で、よく見ると、なんとさきほどのお役人で、右手に銭二百文を、左手に血書を持っていた。顔役は大声でその罪を数えて責め立てた。これは張処士が恨みを飲んで死に、張仁亀が冥府に罰せられたことを敷衍したのである。恨みを飲んだ死を見事に描き出し、首を吊ったのを雷に打たれたと改めており、観るものは身の毛がよだつ。（作者は）まったくもって名人である。崑曲の劇で、雷に打たれる筋書きのものは二つある。一つは『双珠記』の李克成・張有徳である。李克成は部隊長でありながら部下の兵卒の妻を我が物にしようとして、兵卒を罪に陥れ、その妻が貞節を守って死ぬことになってしまった。この話は『輟耕録』にみえる。兵卒は妻が死んだことで許され、売られた子も帰ってくるが、しかし部隊長にだけは報いがない。そのため、天が雷で打つことで溜飲を下げるのを思いついた。しかし『双珠記』の作者は、兵卒の妻が子を売り、淵に身を投げた後、神の助けで死なないとしているばかりか、父子・夫婦を後に団円させているので、李克成は必ずしも天誅を受ける必要がないのは明白である。そのため『双珠記』の李克成・張有得は雷に打たれて死ぬとはいえ、それでも見るものをはっとさせるには足りない。『西楼記』の趙不将に至っては、自作を評価されなかったことから于叔夜の父に（遊女とのつきあいを）讒言し、父が于叔夜の遊女と添い遂げるのを許さなかったものである。趙不将が私憤を漏らしたのは確かだが、間違ったことを言ったわけではなく、そのために雷に打たれるのは、まことにもって冤罪である。おそらく、（作者の）袁于令は趙鳴陽と仲が悪く、恨みを抱いていたので、雷に打たせて溜飲を下げることを思いついたのだろう。『西楼記』の趙不将は、趙鳴陽を指している。趙鳴陽の人品・学識は、袁于令の及ぶところではなく、そのため馮夢竜は『西楼記』を改訂するにあたり、毅然としてこの幕を削除したが、正しいことだ。私は幼いころ亡父に連れられて村芝居を見た。一日目には『双珠記』の「天打」の幕を演じたが、観客は漫然と見ていた。翌日、『清風亭』を演ずると、初めのうちは誰もが切歯扼腕し、最後に大いに溜飲を下げないものはなかった。

銅鑼・太鼓が終わると、厳粛な様子で見合わせ、笑い戯れることはなかった。帰ってからも話題持ちきりで、十日経っても変わらなかった。花部が崑曲に及ばないというのは、鄙夫の見識に他ならない。

（千田）

05 王霸之子王英，既邂逅郭后，迎奉於山。后命往市中招集義兵，市中人欣然從之，爭延王將軍酒食。此從王霸遭市人揶揄反面搬演。英往說姚剛，辭嚴氣直，百挫不撓，作人忠義之氣。

人名注

【王霸】東漢河南潁川潁陽人。字元伯。官至盜虜將軍。《後漢書》卷二十有傳。

【王英】說部東漢中興故事中人物。王霸之子。按：《後漢書・王霸傳》王霸之子名符非英。演王英姚剛事，京劇有《黃一刀》、《王英下山》、《罵寨》等。

【郭后】此當指光武郭皇后。諱聖通。河北真定稟人。《後漢書》卷十上有傳。按：說部東漢中興故事中，郭后恨姚剛打死其弟，灌醉光武謀殺雲臺二十八將，光武醒後處斬。京劇《王英下山》中王英邂逅者為光武公主。待考。

【王霸遭市人揶揄】此事見於《後漢書・王霸傳》。

【姚剛】說部東漢中興故事中人物。姚期之子。按：姚期即銚期，《後漢書》卷二十有傳。其子有丹、統而無剛。

通釈

王霸の子の王英は、偶然郭皇后に出会うと、山寨に（郭皇后を）迎え仕えた。郭皇后は王英に命じ町へ行って義勇兵を募集させたところ、町の人々は喜んでそれに従い、競って王英将軍を宴でもてなした。これは王霸が（光武帝の命によって兵を募ったところ）町の人々に揶揄されたことをひっくり返して演じたものである。王英は姚剛を説得に行くが、その時の口調は厳しく、気持ちはまっすぐで、どんなことにも怯まず、見る人に忠義の気持ちを起こさせる。

（氷上）

06 《魏氏春秋》云：「夏侯玄、何晏名盛於時，司馬景王亦預焉。晏嘗曰：『惟深也，故能通天下之志，夏侯泰初是也。唯幾也，故能成天下之務，司馬子元是也。惟神也，不疾而速，不行而至，吾聞其語，未見其人。』蓋欲以神況諸己也。」子元即司馬師也。師在正始間與泰初、平叔並稱名士，則其風流元謐，可想見矣。今平叔《論語集解》高列學官，與聖經同不朽，而泰初所為《樂毅論》，得王右軍書之，學僮稍能習字，皆旦夕撫臨，無不知有夏侯泰初者，而子元則花部中大淨為之，粉墨青紅，縱橫於面，雄冠劍佩，跋扈指斥於天子之前，居然高洋、爾朱榮一流，所謂「幾能成務」之風，莫之或識矣。《晉書・景帝紀》稱子元「饒有風采，沈毅多大略」，設令準

此而以生，末為之，幅巾鶴氅，白面疏髭，誰復信為司馬師乎。

校注

【魏氏春秋】此文見於《三國志・魏書》九〈何晏傳〉裴松之注。

【何晏】《三國志・魏書》下有「等」字。

【夏侯玄】《魏氏春秋》上有「初」字。《花部農譚》諸本避康熙諱「玄」作「元」。今改。

【惟深也故能通天下之志】按：此句見於《周易・繫辭傳上》。

【唯幾也故能成天下之務】按：此句見於《周易・繫辭傳上》。

【惟神也不疾而速不行而至】按：此句見於《周易・繫辭傳上》。

【跋扈指斥於天子之前】按：京劇、梆子戲等有《紅逼宮》，演司馬師廢曹芳之事，劇中司馬師頭戴太子盔，插雙翎子佩劍上殿。

【饒有風采】《晉書》「饒」作「雅」，「采」作「彩」。

人名注

【何晏】三國魏河南南陽宛人。字平叔。官至吏部尚書。《三國志・魏書》九有傳。

【夏侯玄】三國魏沛國譙人。字泰初，一作太初。夏侯尚之子。官至大鴻臚。《三國志・魏書》九有傳。

【司馬景王】即晉景帝司馬師，字子元。

【王右軍】即晉王羲之。字逸少。瑯琊臨沂人。官至右馬將軍。《晉書》卷八十有傳。

【高洋】即北齊文宣帝。

【爾朱榮】北魏北秀容人。字天寶。官至都督。《魏書》卷七十四、《北史》卷四十八有傳。

書名・作品名注

【魏氏春秋】晉孫盛撰。二十卷。三國魏編年體史書。《隋書・經籍志》著錄。其佚文見於《三國志》裴松之注、梁僧祐編《弘明集》、劉宋劉義慶撰《世說新語》等。

【論語集解】魏何晏等撰。十卷。

【樂毅論】魏夏侯玄撰。論戰國燕樂毅之事。以王羲之之書聞名。

戲曲用語注

【花部】參見《花部農譚》序注。

【大淨】戲曲行當。猶京劇中花臉。按：京劇中司馬師勾紅十字門臉之破臉。

【生】戲曲行當。參見《劇說》卷一006條。

【末】戲曲行當。參見《劇說》卷一006條。

【鶴氅】戲衣之一。繡有仙鶴，道士、軍師等衣之。

通釈

『魏氏春秋』にいう。

夏侯玄、何晏らが一時期名声を博していた頃、司馬師もその列に加えられていた。何晏は次のように述べたことがある。「（『易経』にいう）『物事の奥深さを究められれば、世のすべての考えに通じることができる』というのは夏侯玄である。『物事の裏側にある微妙さを究められれば、世の中のあらゆる務めを果たすことができる』というのは司馬子元である。『神妙な能力があれば、意識をせず自然に（物事の道理に）たどり着くことができる』というのは聞いたことがあるが、それを備えた人物に会ったことがない。」

恐らく（何晏は）神妙な能力をもつ人物を自分になぞらえたのであろう。

子元とは司馬師のことである。司馬師は正始（240～249）年間に名士として夏侯玄、何晏と並び称せられたのであるから、風流でかつ奥ゆかしい人物であったのは想像に難くない。今、何晏の『論語集解』は学舎に置かれ、経典同様に不朽の著作となっている。夏侯玄の著した『楽毅論』は、王羲之の書があり、子供が少し字を書けるようになると、日がな一日手本として練習するので、夏侯玄を知らないものはない。しかし司馬師といえば花部において大浄によって演じられ、白・黒・青・赤で、縦横に隈取りを描き、武官の兜を戴き剣を佩き、天子の前で傍若無人に人を責めたてる。あたかも高洋や爾朱栄の輩のようであり、いわゆる「物事の奥深さを究めている」という風貌は誰も知るまい。『晋書』「景帝記」では司馬師を「雅で風采があり、沈着剛毅で大局を見通していた」と称している。かりに、これにのっとり生あるいは末が演じ、頭巾を戴き鶴氅をまとい、（隈取りをせずに）白粉を塗った顔に幾筋かに分かれた髭をして登場したら、それが司馬師であるとは誰も分からないであろう。

（氷上）

07 花部中有劇名《賽琵琶》，余最喜之。為陳世美棄妻事。陳有父、母、兒、女。入京赴試登第，贅為郡馬，遂棄其故妻，並不顧其父母。於是父母死。妻生事、死葬，一如《琵琶記》之趙氏，已而挈其兒女入都，陳不以為妻，並不以為兒女。皆一時艶羨郡馬之貴所致。蓋既為郡馬，則斷不容有妻、有兒女也。妻在都，彈琵琶乞食，即唱其為夫棄之事。為王丞相所知。適陳生日，王往祝曰：「有女子善彈琵琶，當呼來為君壽。」至，則故妻也。陳彷徨，彊斥去之，乃與王相詬。王盡退其禮物，令從人送旅店，與夫人、公子，陰謂其故妻曰：「爾夫不便於廣眾中認爾，余當於昏夜送爾去，當納也。」果以王相命，其閽人不敢拒。陳亦念故，乃終以郡主故，仍強不納。妻跪曰：「妾當他去，死生唯命。兒女則君所生，乞收養之耳。」陳意亦愴然動。再三思之，竟大詈，使門者搗之出。念妻在非便，即夜遣客往旅店刺殺妻及兒女。幸先知之，店主人縱之出，匿於三官堂神廟中。妻乃解衣裙覆其兒女，自縊求死。三官神救之，且授兵法焉。時西夏用兵，以軍功，妻及兒女皆得顯秩。王丞相廉知陳遣客殺妻事，甚不平，竟以陳有前妻欺君事劾之，下諸獄。適妻帥兒女以功歸，上以獄事若干件令決之，陳世美在焉。妻乃據皋比高坐堂上。陳囚服縲絏至，匍匐堂下，見是其故妻，慚怍無所容。妻乃数其罪，責讓之，洋洋千餘言。說者謂：《西廂・拷紅》一齣，紅責老夫人為大快，然未有快於《賽琵琶・女審》一齣者也。蓋《西廂》男女猥褻，為大雅所不欲觀。此劇自〈三官堂〉以上，不啻坐凄風苦雨中，咀荼齧檗，鬱抑而氣不得申，

忽聆此快，真久病頓甦，奇癢得搔，心融意暢，莫可名言，《琵琶記》無此也。然觀此劇者，須於其極可惡處，看他原有悔心。名優演此，不難摹其薄情，全在摹追其悔。當面詬王相、昏夜謀殺子女，未嘗不自恨失足。計無可出，一時之錯，遂為終身之咎，真是古寺晨鐘、發人深省。高氏《琵琶》，未能及也。

人名注

【陳世美】秦香蓮故事中人物。中狀元後棄故妻。

【趙氏】即趙五娘。參見《劇說》卷五208條。

【故妻】按：陳世美故妻，《百家公案》第二十六回〈秦氏還魂配世美〉作「秦氏」，寶卷《三官堂》作「秦雪梅」，而京劇、梆子戲等作「秦香蓮」。

【王丞相】即王延齡。說部包公案故事中人物。官居丞相，剛直清廉，為包拯之恩師。

【紅】即紅娘。參見《劇說》卷二069條。

【老夫人】即鄭氏。《西廂記》中崔鶯鶯之母。

【高氏】即元高明。參見《劇說》卷一033條「高拭則成」注。

戲曲用語注

【花部】參見《花部農譚》序「花部」注。

書名・作品名注

【賽琵琶】花部劇目。演宋陳世美中狀元後，棄糟糠秦香蓮及子女，招為郡馬，而秦香蓮於三官堂得天書，討西夏有功，指責陳世美，包拯斷案事。按：《劇說》稿本卷二098條下原有「村劇中有《賽琵琶》者，王翛然與包拯並見一劇中，非也」二十一字，焦氏自刪之。可知乾嘉間《賽琵琶》亦係包公案故事。事見《百家公案》第二十六回〈秦氏還魂配世美〉。寶卷有《三官堂》，鼓詞有《秦香蓮》，京劇有《秦香蓮》、《女審問》、《柳林池》、《鍘美案》等。

【琵琶記】參見《劇說》卷一052條。

【西廂】即元王實甫《西廂記》雜劇。參見《劇說》卷一051條。

【拷紅】即《西廂記》第四本第二折。

【女審】花部《賽琵琶》中一齣。按：京劇有《女審問》。

【三官堂】花部《賽琵琶》中一齣。按：寶卷有《三官堂》，京劇有《柳林池》，一名《三官堂》。

通釈

花部に『賽琵琶』という演目がある。わたしはこの芝居が非常に気に入っている。陳世美が妻を捨てる話である。陳世美には父・母・息子と娘がいた。都に上り科挙を受けて及第し、親王の婿に迎えられると、元の妻を捨て、両親をも顧みなかった。そして両親は死んでしまった。生前には世話をし、没後には葬儀を上げ、妻はまるで『琵琶記』の趙氏のようであった。葬儀が終わると息子と娘を連れて都に上ったが、陳世美は自分の妻であることも、自分の息子と娘であることも認めなかった。いずれも婿君という身分の貴さに目がくらんでいたためであった。婿君となった上は、妻と息子と娘がいたことなど決してあってはならないということだろう。妻は都で琵琶を弾いて物乞いをし、夫に捨てられたことを歌った。それが王丞相の知るところとなった。ちょうど陳世美の誕生日が来たので、王丞相は祝いに行って言った。「琵

琵琶を弾くのがうまい女がいるので、呼びよせて言祝ぎをさせましょう。」女がやってくると、元の妻であったので陳世美はうろたえ、むりやり追い出し、王丞相までも罵った。王丞相は贈り物を引き上げると、従者に宿まで運ばせて、元の妻と息子に与えることにした。王丞相はひそかに元の妻に言った。「お前の夫は人々の前でお前を妻と認めるわけにはいかなかったのだろう。わたしが夜中にお前を送っていってやれば、きっと受け入れるだろう。」言ったとおり、王丞相の命とあって門番も拒めなかった。陳世美もまた情をかきたてられたが、姫君とのことを考えて、どうしても元の妻を受け入れなかった。妻はひざまずいて言った。「わたくしはお暇を頂戴してもかまいません、死ぬも生きるもあなたのお心に従います。しかし息子と娘だけはあなたさまの子ですから、どうか引き取っていただけませんか。」陳世美も悲しみに心を動かされ、再三考えたが、けっきょくのところ大いに罵り門番につまみ出させた。そして妻がいることが不都合になると思い、夜半に刺客を宿屋に送って妻と子供たちを殺させた。さいわい先にそれと分かったので、宿の主人は妻と子供たちを逃がし、三官堂の神廟に隠した。妻が衣を脱いで子供たちに覆いかぶせ、首を吊ろうとしたとき、三官神が妻を救い、兵法を授けた。ちょうどその時、西夏が戦をしかけ、妻は子供たちと軍功を上げていずれも高い位を得た。王丞相は陳世美が刺客を送って妻を殺そうとしたことをつきとめて憤慨し、陳世美には妻がありながら帝をあざむいたとして弾劾し、獄に下した。ちょうど妻が子供たちと手柄を立てて戻ってきたので、いくつかの事件の審判を行うよう命じ、陳世美の件もその中に含まれていた。妻は虎皮の将軍の椅子を正庁にすえて出座した。陳世美はしばられて引き出され、白洲にはいつくばって見てみれば、かつての妻であったので、恥ずかしさに身の置き所もない様子であった。妻は夫の罪を数え上げて責めたて、千語以上を述べ立てた。ある人は、『西廂記』の「拷紅」の場面で紅娘が（張生と崔鶯鶯との関係をとがめる）鄭夫人を痛罵するのは大いに爽快だが、『賽琵琶』の「女審」の場面ほど胸がすくものはないと言っている。『西廂記』は男女がふしだらな交わりをするもので、学識のある人々は観たがらない。『賽琵琶』は「三官堂」の場面より前は、いくたの風雪を耐え忍び、草の根をかじるような苦労をして、鬱々として気が晴れないところに、とつぜんこの胸のすく場面を聞くことになる。これはまったく長患いがふいに回復し、ひどく痒いところに手が届いたようなもので、はればれとする心地よさは、言葉にできない。これは『琵琶記』には見られないものだ。しかしこの劇を観るものは、陳世美の極悪非道の中にもじつは悔いる心があることを見て取るべきである。名優がこの役を演ずる時には、その薄情さを描くことは難しくなく、すべてはその後悔を描くことにかかっている。王丞相を面罵したときにも、闇夜に子供たちを殺そうとしたときにも、いつもみずからの過ちを悔いていたのだ。はかりごともつたなく、一時の過ちで人生を踏み外してしまう。まさしく古寺の朝の鐘の音が人に我が身を省みさせるというもので、高明の『琵琶記』も及ばない。

訳注

【三官神】天官・地官・水官の三柱の神の総称。

【古寺の朝の鐘の音が人に我が身を省みさせる】唐・杜甫の「龍門の奉先寺に遊ぶ」詩の第七句・第八句「覚めんと欲して

晨鐘を聞けば、人をして深省を発せしめん（目覚めようとしたところに朝の鐘を聞けば、我が身を深く省みさせる）」をふまえている。

（川）

08《義兒恩》之兒，為其母前夫之子。母攜來為人妾，而思以毒藥謀殺其嫡。值妾兄至，嫡以妾所饋酒肉食之，兄中毒死，妾乃稱嫡殺其兄。為此兒者，誠難自處矣，黨其親母則枉殺嫡，鳴嫡枉則殺其親母，乃自認毒殺其舅。此子真孝子也，故曰「義兒」。行刑日，與一大盜同縛，盜斬而赦至。其嫡持敝席來收兒屍，見盜首大慟。此本元人《趙頑驢偷馬殘生送》。

書名・作品名注

【義兒恩】清代花部劇目。按：《劇說》卷一047條：「近安慶幫子腔劇中，有《桃花女與周公鬬法》、《沈香太子劈山救母》等劇，皆本元人。又《義兒恩》，兒問罪在獄，適兒赦而盜殺，母誤盜屍為兒屍，全本《蝴蝶夢趙頑驢偷馬殘生送》一折也」。京劇、梆子戲有《藥茶計》演此事。

【趙頑驢偷馬殘生送】即元關漢卿《蝴蝶夢》雜劇。參見卷一045條。

按：《元曲選》本題目作「趙頑驢偷馬殘生送」。

通釈

『義児恩』に出てくる子は、その母親と前夫との間の子である。母親は子を連れて別の人の妾となったが、毒薬で嫡男を殺そうとした。その時ちょうど妾の兄がやって来たので、嫡男は妾に与えられた酒と肉をふるまったところ、兄は毒にあたって死んでしまった。妾はしかし嫡男が兄を殺したと言い立てた。妾の子は完全に進退窮まってしまった。実の母に与すれば嫡男を無実の罪で殺すことになり、嫡男の冤罪を訴えれば実の母を殺すことになってしまう。そこで自分が伯父を毒殺したと申し出た。この子は本当の孝行者であるから「義児」なのである。刑の執行の日、大泥棒と一緒に縛られ、泥棒が先に斬られたところに恩赦が届いた。嫡男は破れた筵を持って子の亡骸を受け取りに来たが、泥棒の首を見て大いに慟哭した。この部分については元の『蝴蝶夢』雑劇に基づいている。

（山下）

09《雙富貴》之藍季子，以母苦其嫂，潛代嫂磨麥。又潛入都為嫂尋兄，行李匱乏，赤身行乞，叫化於街。觀之令人痛哭。

人名注

【藍季子】說部雙富貴故事中人物。

書名・作品名注

【雙富貴】清代花部劇目。按：明無名氏《雙貴圖寶卷》、梆子戲《血汗衫》、婺劇《雙富貴》等演此事，《綴白裘》第十一集〈磨房〉、〈串戲〉以及京劇《十八扯》等源於此戲。

通釈

『双富貴』の藍季子は、母親が兄嫁をいびるため、兄嫁の代わり

にこっそり粉を挽いた。また兄嫁のためこっそり都へのぼって兄を探したが、路用が足りなくなってしまい、身一つで乞食となり、街でおめぐみを求めた。見る者は悲痛の涙を誘われる。

（山下）

10《紫荊樹》之枯死，竟為田三之妻斧斤所致。田大士人也，二則胥隸耳。樹死鴉散，終不肯析居，在田二尤難得者矣。

人名注

【田三】紫荊樹故事中人物。田家三子。

【田三之妻】紫荊樹故事中人物。按：京劇作「李三春」，柳琴戲作「劉三春」。

【田大】紫荊樹故事中人物。田家長子。《續齊諧記》作「田真」。

【二】即田二。紫荊樹故事中人物。田家次子。

書名・作品名注

【紫荊樹】清代花部劇目。京劇、梆子戲等亦有此目。按：事見於梁吳鈞《續齊諧記》，亦見於明馮夢龍《醒世恒言》卷二〈三孝廉讓產立高名〉楔子。

通釈

『紫荊樹』で木が枯れるのは、つまるところは田三の妻が斧を入れたためである。田大は士大夫だったが、田二はただの胥吏にすぎなかった。（木が枯れるようなことがあったら家財を分けるという約束に反して）木が枯れて烏が飛び去っても、家財を分けなかったのは、とりわけ田二にとってありがたいことだった。

訳注

【田三の妻が斧を入れた】『続斉諧記』や『醒世恒言』では特に紫荊樹が枯れた原因を述べていないが、『京劇匯編』所収『打竈王』では、三男の嫁が密かに斬り倒したためとしている。

（山下）